A-2

中国語動量詞が数える個体と集合イベント

神戸大学（院）　　王　丹楓　　danfeng903@hotmail.com

1. はじめに

物事の数量を数える際、英語‘two movies’のように数詞が直接名詞につき、可算・不可算名詞で数量の変化を表す言語もあれば、日本語や中国語など東アジア諸語のように、classifiers（類別詞、量詞）が用いられる言語もある。中国語では、イベントの数量を数えるときに、“两场电影（二本の映画）”の“场”のようなevent classifier（Huang and Ahrens 2003）が名詞に義務的に付けられている。しかし、(1) で示される“拳”“次”“顿”のように動詞と共起するものもある。これらはactivity classifier（“動量詞”）と呼ばれ、イベントが発生する頻度（frequency）を計量する（Ahrens and Huang 2016:187)。「三回殴る」というイベントを数えるには、中国語では、“拳”“顿”“次”という3つの動量詞で数えることができるが、日本語では「回・度」としか訳すことができない。

(1) 小张　打　了　小王　三　拳/顿/次。
張さん　殴る　PERF　王さん　三　こぶし/回・度/回・度
「張さんが王さんを(こぶしで)三回(度)殴った。」

中国語の動量詞は刘（2013）によると55語もあり、中国語伝統文法（朱 1982，周 2012など）では、動量詞が専用動量詞と借用動量詞に分類され、細かく使い分けられている。日本語では、動量詞の数は「度」「回」「遍」などしか用いられず、数が多いとは言えない。人間はイベントを数えるときに、どのように物事を認知し、言語を通して表しているかは異なる特徴がみられている。本研究では、名詞に付くevent classifierではなく、動詞と共起する動量詞を対象に、中国語動量詞がどのように使い分けられているのかを認知的に明らかにする。

2. 先行研究

具体物を数える量詞（名量詞）に関する研究は多数あるのに対し、動作行為を数える量詞（動量詞）に関する研究は多いとは言えない。動量詞は「可算的で個体性をもつ実体」であるイベント（Rothstein 2004:4）を数えるものとして用いられている。従来の中国語伝統文法において、動量詞が専用動量詞(動量詞としてしか用いられないもの)、借用動量詞（道具・身体部位・付随結果などの名詞から借用して動量詞になるもの）に分類されている（朱 1982，周 2012など）ものの、各種の動量詞の間にどのような具体的な関係があるか明確になっていない。動量詞の内部における区別について、Zhang(2017:270)は次のように述べている。

(2) Classifiers like ci are used to count an event denoted by VP as a whole; whereas instrument classifiers are used to count ‘sub-event’ or a ‘slice’ of an event.

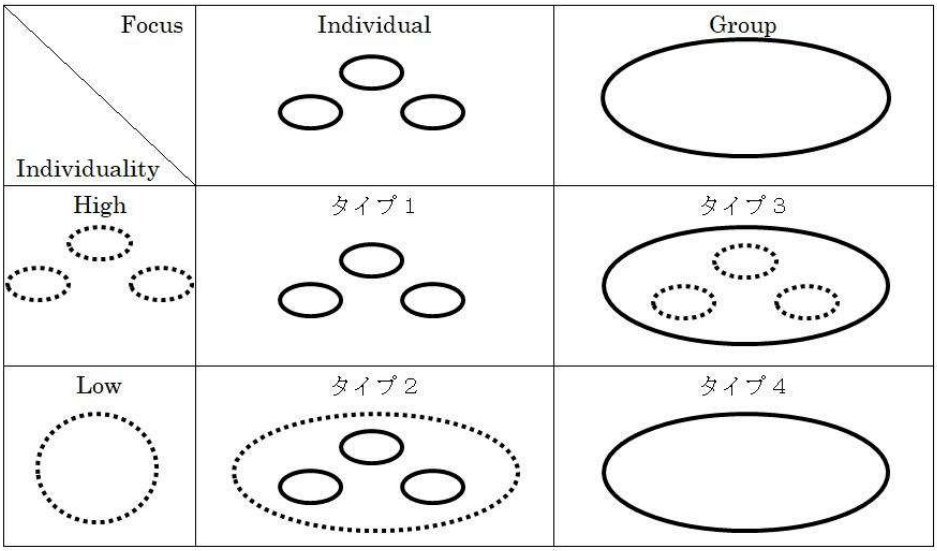
つまり、“次”のような動量詞はVPで示されているイベントを複数の出来事を包括したイベントとして数えることに対し、道具名詞からきた借用動量詞はその下位のイベントあるいはイベントの断片を数えるという。しかし、(3) で示されるように、“次”のような動量詞は複数の出来事を包括したイベントを数えることができるだけでなく、個体のイベントを数えることもできる。

(3) 小张　打　了　小王　三　顿，每　顿　打　了　三　次。
張さん　殴る　PERF　王さん　三　回　毎　回　殴る　PERF　三　回
「張さんが王さんを三度殴って、その度に三回殴った。」

3. 図地関係と認知の焦点化

人間は認知する事態の中のすべての存在に対し、同じ程度に注目してその事態を解釈していくことはできない。ある特定のスタンス及び視点から、何かに注目して事態を解釈する。この注目される部分、すなわち、認知的に役立っている部分は「図」と呼ばれ、残りの部分である「地」と区別される。人間はこの図を地（あるいは地の一部）と比較し、その差異を連続的に認知することで、事態全体を把握していく。例えば、伊藤（2004:81）では、日本語の名詞と共起する類別詞の用法を、数えられる物質の個別性の度合いと物質への焦点の当て方が重要であるとし、個体とまとまりのいずれかに焦点が当てられることによって類別詞が決められるとしている。伊藤（2004）は、表１に示すように、数えられる物質の個別性が高いものと低いもの、物質の個体に焦点を当てている場合に分けて考慮し、日本語類別詞の用法を4つのタイプに分類した。「粒」という類別詞で物事を数える際、「3粒のチョコレート」のように、まとまりを意識せずに個体を数えているタイプ１と、「3粒のブドウ」の「ブドウ」のように、ブドウの房というまとまりを想起させながら、そのまとまりの構成員を数えているタイプ２という2種類のタイプがある。また、ブドウを数えるときに、「3粒のブドウ」は「ブドウの個体」に焦点を当てている（タイプ２）のに対し、「3房のブドウ」は「ブドウのまとまり」に焦点を当てている（タイプ３）。本研究では、イベントを数えるときに、中国語動量詞は具体物を数える類別詞と類似した特徴がみられ、イベントでは個体と集合への焦点の当て方に対応して、動量詞が使われていると考える。

表１：日本語類別詞の用法の分類（伊藤 2004:80）



4. 動量詞が数える個体と集合イベント

Cusic（1981:61）は、イベントの出現する頻度に(4)のような意味的な区別があると主張している。

（4）The salesman rang the doorbell twice.
　a. On two separate occasions he rang the bell once.
　b. On one occasion he rang the bell two times.

（4）は2通りの読みがあり、(4a)の「セールスマンが二つの場面でチャイムをそれぞれ一回ずつ鳴らした」と、（4b）の「セールスマンがチャイムを二回連続的に鳴らした」の読みがある。このCusicの主張を中国語に当てはめると、（1）の“次”は「王さんを三つの場面で殴った」と「王さんを同じ場面で連続的に三回殴った」という2通りの読みがあるといえる。それに対し、“拳”は「王さんを同じ場面で連続的に三回殴った」

という（4b）の読みだけをもち、“顿”は「王さんを三つの場面で殴った」という（4a）だけの読みになる。

人間はイベントの個体か集合に焦点を当てているかに基づいて（1）を再考すると、“拳”は「こぶしで殴る」というイベントの個体を数えているのに対し、“顿”は「殴る」というイベントの集合を数えていると言える。イベントの集合は個体から構成されるため、（5a）で示すように、“顿”で数える「殴る」というイベントはいくつかの“拳”で数える「こぶしで殴る」という個体のイベントを包含することが可能である。しかしながら、逆は意味的に許されない。そのため、（5b）のように、“拳”で数えるイベントの個体をさらに“顿”で数えるイベントの集合と共起することができない。

（5）a. 小张　打　了　小王　三　顿，每　顿　打　了　三　拳。
張さん　殴る　PERF　王さん　三　回　毎　回　殴る　PERF　三　こぶし
「張さんが王さんを三度殴って、その度にこぶしで三回ずつ殴った。」
b.*小张　打　了　小王　三　拳，　每　拳　打　了　三　顿。
張さん　殴る　PERF　王さん　三　こぶし　毎　こぶし　殴る　PERF　三　回

5. 動量詞の認知実験

これまでの動量詞に関する研究は内省に基づくものがほとんどであり、実証的に検討する必要があると考えられる。従って、本稿は、上述した先行研究の成果を踏まえて、次のような仮説を立て、本稿では、これらの仮説について、質問紙調査によって検証を行い、中国語動量詞がイベントを数えるときに、集合読みと個体読みがあることを証明する。

仮説1. 集合読みをもつ動量詞が数えるイベントは個体読みをもつ動量詞が数えるイベントを包含できる。

2. 個体読みをもつ動量詞が数えるイベントは集合読みをもつ動量詞が数えるイベントを包含できない。

3. 両方読みをもつ動量詞が数えるイベントは文脈によって集合読み、または個体読みをもつ動量詞の役割を果たす。

素材　表２に示されたように、集合読みのみを持つ動量詞4語（“顿”“番”“阵”“通”）、個体読みのみを持つ動量詞4語（“拳”“脚”“声”“下”）、両方読みを持つ動量詞1語（“次”）を選択した。

表２：実験素材となる中国語動量詞

番号	動量詞	読み方	意味	数えるイベントの種類
1	顿	dun4	動作の回数を表し、通常、食事・叱責・勧告・殴打・罵りなどの動作に用いられる。	集合
2	番	fan1	動作・行為の回数を表し、時間がかかったり労力を要する行為に多く用いられる。	集合
3	阵	zhen4	ひとくぎりの時間を表し、通常、突発的な持続時間の比較的に短い事柄に用いられる。	集合
4	通	tong1	動作の初めから終わるまでの時間を表す。	集合
5	拳	quan2	こぶしで人を打つ回数を表す。	個体
6	脚	jiao3	足で行われる動作の回数を表す。	個体
7	声	sheng1	発声する回数を表す。	個体
8	下	xia4	動作の回数を表し、ふつう短時間の動作に用いられる。	個体
9	次	ci4	動作の回数を表す。通常、繰り返し現れる事柄に用いられる。	集合／個体

参加者　中国語母語話者（北方方言話者限定）26人（男性15人、女性11人；平均年齢27.0歳、標準偏差3.4）である。

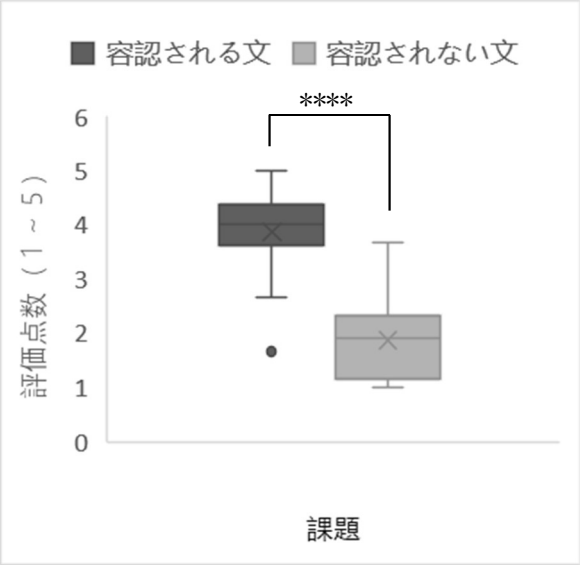
質問紙　予備調査により、[“次”，“拳”]　[“脚”，“顿”]　[“声”，“通”]　[“下”，“次”]　[“下”，“阵”]　[“番”，“次”] という動量詞の組み合わせ6パターンを選び出し、(5a) のような文脈を用いて、文を作成した。例えば、[“次”，“拳”] の場合、(6a) ～ (6d) のように“次”と“拳”を①と②の位置に設定することで4文を作成する。全部で（4文×6パターン）計24文になる。フィラーとして17文を挿入し、計41文である。

これらの動量詞からなる文の自然度を評価するため、用意した41文をランダムに並び替え、参加者に文の容認可能性を1（とても不自然）－5（とても自然）スケールで判断するように指示した。本調査の参加者は中国人であるため、中国語のアンケートを用意した。

手続き　調査は2018年7月に神戸大学に在学する中国人留学生を対象にウェブ上で実施したものであり、実験の所要時間は約15分であった。

(6)　a. 小张打了小王三 ①次 ，每 ①次 打了三 ②拳 。
　　b. 小张打了小王三 ①拳 ，每 ①拳 打了三 ②次 。
　　c. 小张打了小王三 ①次 ，每 ①次 打了三 ②次 。
　　d. 小张打了小王三 ①拳 ，每 ①拳 打了三 ②拳 。

結果　中国語動量詞の集合読みと個体読みの結果は図１に示すとおりである。課題「集合読みと個体読み」（参加者間要因）の一元配置分散分析を行った。その結果、課題「集合読みと個体読み」の主効果は有意であった（$F(1, 24)= 106.315$, $p<.001$, partial $\eta^2=0.816$）。図１に示されるように、容認される文の評価点数は容認されない文より高いことが明らかであり、このことは、中国語母語話者にとって、動量詞“顿”“番”“阵”“通”は集合読み、“拳”“脚”“声”“下”は個体読み、“次”は両方読みであることを示している。



ソース	SS	df	MS	F	P	partial η^2
課題	51.21	1	51.21	106.32	0.0000****	0.816
誤差	11.56	24	0.48			

図１　集合読みと個体読みの主効果

6. 動量詞の集合読みと個体読み

図２で示すように、中国語の動量詞には個体イベントと集合イベントを数える動量詞に分けられるが、い

ずれの用法をもつものがある。“次”は集合と個体の2通りの読みがある。例えば、(7a) のように、(5a) の“顿”は“次”で入れ替えることができ、集合を数える役割を果たしており、「王さんを三つの場面で攻撃し、その度に拳で三回攻撃した」という読みをもつ。また、(7b) のように、“次”を (5a) の“拳”に入れ替えることも可能であり、“次”は身体部位の意味は含まないが、「王さんを三回攻撃をした」という個体のイベントを数えている。

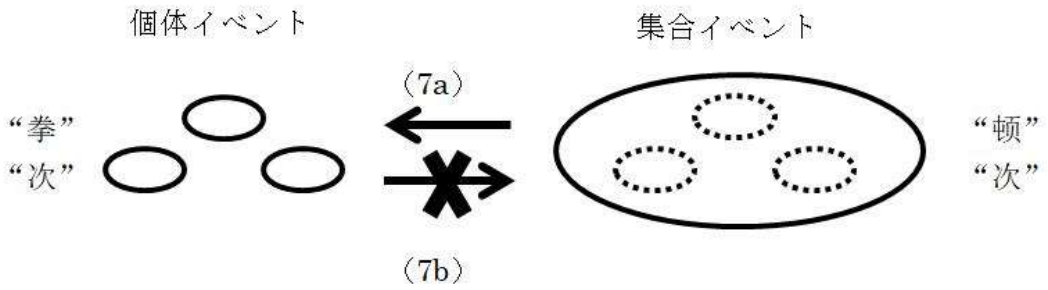


図２　個体と集合イベントの分類

(7) a.小张　打　了　小王　三　次，每　次　打　了　三　拳。
張さん　殴る　PERF　王さん　三　回　毎　回　殴る　PERF　三　こぶし
「張さんが王さんを三度殴って、その度にこぶしで三回殴った。」
b.小张　打　了　小王　三　顿，每　顿　打　了　三　次。（例 (3)）
張さん　殴る　PERF　王さん　三　回　毎　回　殴る　PERF　三　回
「張さんが王さんを三度殴って、その度に三回殴った。」

中国語では動量詞の集合と個体を数える区別は珍しいことではない。例えば、(8a) のように、“下”で数える「ベルを押す」というイベントは「連続的に二回押す」という個体の読みしかない。(8b) のように、“番”で数える「説得する」というイベントが何回もあるが、同じ場面で発生するものではなく、離散的に異なる場面に分布する読みになり、“番”が数えるのは異なる場面で発生する抽象的な集合であると言える。(8c) の動量詞“回”は、「異なる場面における二回の試合にそれぞれ勝った」と「同じ場面における試合二回連続的に勝った」という両方の読みがあるため、文脈によって解釈が決められる。

(8) a. 他　按　了　两　下　门铃。
彼　押す　PERF　二　回　ベル
「彼はベルを二回押した。」
b. 他　劝　了　她　好几番。
彼　説得する　PERF　彼女　何回も
「彼は彼女を何度も説得した。」
c. 他　比赛　赢　了　两　回。
彼　試合　勝つ　PERF　二　回
「彼は試合で二回勝った。」

したがって、動量詞が数えるイベントは図３のように階層化されると本研究では考える。“次”と“回”はすべてのイベントと共起できるため、最上位に階層化される。集合で数えるイベントは“顿”“番”“通”“阵”などと共起するものは次の段階に設定される。個体で数えるイベントは一部の借用動量詞（道具・身体部位）と専用動量詞（“下”“遍”など）で数えるが、さらにその下位に設定される。各段階における各動量詞の意味と用法はある程度重なることがあるが、動量詞の範疇化の問題になり、今後の研究課題としたい。

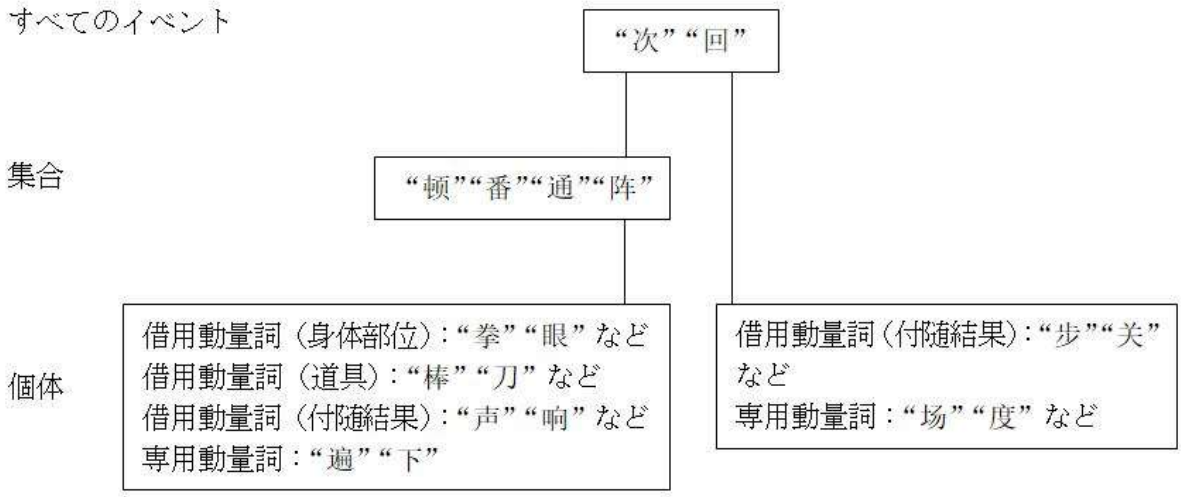


図３　動量詞が数えるイベントの階層化

7. おわりに

伝統中国語文法では動量詞を借用動量詞と専用動量詞に分類しているが、本研究では、認知実験を通して、中国語の動量詞は焦点の当て方によって、個体イベント類（“拳”“眼”など)、集合イベント類（“顿”“番”など)、共通イベント類（“次”“回”）という3種類に分けられることを主張した。名詞が階層構造をもつことはよく知られている（Link 1983）が、本研究では、動量詞が数えるイベントも階層化されているのではないかと主張したが、さらに他の類別詞言語からの検証が必要である。

主要参考文献

Ahrens, Kathleen and Huang, Chu-Ren. 2016. ‘Classifiers’. In Huang, Chu-Ren and Shi, Dingxu (eds.) *A Reference Grammar of Chinese*. Cambridge University Press.pp.169-198.

伊藤紀子 2004　「形状類別詞『粒』の用法とまとまり性」. 西光義雄・水口志乃扶 編『類別詞の対照』. くろしお出版. pp.79-93.

Cusic, David Dowell. 1981. *Verbal plurality and aspect*. Doctoral Dissertation, Stanford University.

Huang, Chu-Ren and Ahrens, Kathleen . 2003. ‘Individuals, kinds and events: classifier coercion of nouns’. *Language Sciences* 25, pp.353-373.

Link, Godehard. 1983. ‘The Logical Analysis of Plurals and Mass Terms: A Lattice-Theoretic Approach’, in Bauerle, R. et. al. (eds.). *Meaning, Use, and Interpretation of Language*. Berlin: Walter de Gruyter. pp. 301-323.

刘子平 编 2013 《汉语量词大词典》 上海辞书出版社.

Rothstein, Susan. 2004. *Structuring Events: A Study in the Semantics of Lexical Aspect.* Oxford: Blackwell Publishing.

Zhang, Niina Ning 2017. The Syntax of Event-internal and Event-external Verbal Classifiers. *Studia Linguistica* 71(3), pp.266-300.

周娟 2012 《现代汉语动量词与动词组合研究》 暨南大学出版社.

朱德熙 1982 《语法讲义》 商务印书馆.